

文献 (参考文献)

- (6) Dirac, Principles of Quantum
Mechanics, Oxford (1935), Chap. XII.
(7) Moller, 'ZS. f. Phys. 70 (1931), 786.

N19 080 (MT)

C031-030-080

古典電気力学の基礎に就て、II、

湯川秀樹

谷川安彦

物岡 進

(昭和19年7月15日 講演)

§5. 電子に対する相対論的考察

前論文に於て吾々は古典的電磁場論に

Lorentzの電子論を以て——量子電気力学によつて基礎づけることを試みた。その場合、電子に対する波動函数としてハスカラー函数を取り、スピン及び相対論的効果の影響を無視したのである。この點は電子に対するDiracの波動方程式を取りることによつて容易に改良せられる。先づ微視的電磁場から巨視的電磁場を導き出す手續は以前と同様に出来る筈であるが、こゝではvan Vleckに倣つて、⁽²⁾電磁ポテンシャルを微小な法を採用することにする。即ち巨視的電磁場 (\mathbf{e}, \mathbf{h}) を

$$\left. \begin{aligned} \mathbf{e} &= -\text{grad } \varphi - \frac{1}{c} \frac{\partial \mathbf{a}}{\partial t} \\ \mathbf{h} &= \text{curl } \mathbf{a} \end{aligned} \right\} (54)$$

(2)

存在関係は

定義された微視的電磁ポテンシャル (φ, \mathbf{a})
 を導入するにこれより、これをよは

$$\left. \begin{aligned} (\Delta - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2}) \varphi &= -4\pi\sigma \\ (\Delta - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2}) \mathbf{a} &= -\frac{4\pi}{c} \mathbf{i} \end{aligned} \right\} (55)$$

存在波動方程式及び Lorentz の条件

$$\text{div } \mathbf{a} + \frac{1}{c} \frac{\partial \varphi}{\partial t} = 0 \quad (56)$$

を満足し得ればよい。 ~~但し~~ (55) の右辺の
 電荷密度の及び電流密度 \mathbf{i} として、Dirac
 の電子論に従って

$$\left. \begin{aligned} \sigma &= -e \tilde{\psi} \psi \\ \mathbf{i} &= -ec \tilde{\psi} \boldsymbol{\alpha} \psi \end{aligned} \right\} (57)$$

と取る。但し ψ は 4 成分を持つ Dirac
 の波動関数で、 $\tilde{\psi}$ は ~~その~~ 複素共転関数であ
 る。 $\boldsymbol{\alpha}$ は 4 行 4 列の $\psi^{(2)}$ 行列を成分とする
 ベクトルで、その形式はよく知られてゐる通りであ

(3)

30 $\Psi, \tilde{\Psi}$ の成分を

$$\left. \begin{aligned} \Psi_i(x, y, z, t) &\equiv \Psi_i, & \Psi_i(x', y', z', t) &\equiv \Psi_i' \\ \tilde{\Psi}_i(x, y, z, t) &\equiv \tilde{\Psi}_i, & \tilde{\Psi}_i(x', y', z', t) &\equiv \tilde{\Psi}_i' \end{aligned} \right\}$$

$$i = 1, 2, 3, 4 \quad (58)$$

と書くと、それ等は

$$\Psi_i \tilde{\Psi}_j' + \tilde{\Psi}_j' \Psi_i = \delta_{ij} \delta(x-x') \delta(y-y') \delta(z-z') \quad \left. \vphantom{\Psi_i \tilde{\Psi}_j' + \tilde{\Psi}_j' \Psi_i} \right\}$$

$$\Psi_i \Psi_j' + \Psi_j' \Psi_i = \tilde{\Psi}_i \tilde{\Psi}_j' + \tilde{\Psi}_j' \tilde{\Psi}_i = 0$$

$$i, j = 1, 2, 3, 4 \quad (59)$$

等の交換関係は満足しなければならない。

そこで非相対論的の方法によつて (55) を積分し、電荷及び電流の分布が夫々の、 i 座標からこの場合の電磁ポテンシャルを求めると、(4)(5)(7) 古典電磁力の場合と全く同様

に、 $\tilde{\Psi}$ として遅延ポテンシャル

$$\varphi_r(r, t) = \iiint \frac{\rho(r', t')}{R} \delta(R - cT) dx' dy' dz' dt'$$

$$a_r(r, t) = \iiint \frac{j(r', t')}{R} \delta(R - cT) dx' dy' dz' dt'$$

$$(60)$$

(4)

が得られ、 v_0 に対し

$$\left. \begin{aligned} R &= |r - r'| \\ T &= |t - t'| \end{aligned} \right\} (61)$$

(が不変性, 光速度 c)

である。この他に更に外部電磁場の電磁ポテンシャル φ_e, a_e が不変性で表わされることを示すことができる。

$$\left. \begin{aligned} (\Delta - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2}) \varphi_e &= 0 \\ (\Delta - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2}) a_e &= 0 \end{aligned} \right\} (62)$$

が満足される φ_e, a_e は、微視的電磁ポテンシャル

$$\left. \begin{aligned} \varphi &= \varphi_e + \varphi_r \\ a &= a_e + a_r \end{aligned} \right\} (63)$$

より得られる。このとき、 φ_e, a_e は、

このとき、 φ_e, a_e は、 φ, a と同形の関数である。これを代入し、

$$\left. \begin{aligned} E &= -\text{grad } \varphi - \frac{1}{c} \frac{\partial A}{\partial t} \\ B &= \text{curl } A \end{aligned} \right\} (64)$$

(5)

及 v (56) と同形の ~~波~~ 関係

$$\operatorname{div} A + \frac{1}{c} \frac{\partial \Phi}{\partial t} = 0 \quad (65)$$

を満足するものとする。Maxwell の場方程式 (1) 及 v 関係式 (4) より、波動方程式

$$\left. \begin{aligned} (\Delta - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2}) \Phi &= -4\pi(\rho - \operatorname{div} P) \\ (\Delta - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2}) A &= -\frac{4\pi}{c} (\mathbf{I} + \frac{\partial P}{\partial t}) \end{aligned} \right\} (66)$$

が導かれる。van Vleck に従って微視的ポテンシャルと巨視的ポテンシャルの間は

$$\left. \begin{aligned} \Phi &= \bar{\varphi} \\ A &= \bar{a} \end{aligned} \right\} (67)$$

なる関係を設定すると、§1 の (2) 及 v (3) は当然成立することになる。従って ~~問題 (67)~~ ~~式~~ (63) などで定義された φ, \mathbf{a} の平均値として定義された Φ, \mathbf{A} が波動方程式 (66) を満足することを確認される。よりのである。

§3 と同じ様に媒質内の電子の状態は

各原子

(6)

乃至分子に束縛されたる状態と自由な状態とに
 一應区別し得るものとし、これ等の状態を表は
 す固有函数

$$U_{\alpha i}(r) \quad V_i(r) \quad \left. \begin{array}{l} \alpha=1, 2, \dots \\ i=1, 2, \dots \end{array} \right\} \quad (68)$$

が近似的に直交函数系を形成してあるものと
 する。但しこれ等の函数自身が各々四つ
 の成分を有してあること勿論であるが、 $U_{\alpha i}$
 は α 番目の分子の i 番目の状態を表はし、 V_i
 は自由電子の i 番目の状態を表はすものと考
 へる。原子と電子の波動函数は

$$\left. \begin{aligned} \Psi &= \sum_{\alpha i} a_{\alpha i} U_{\alpha i} + \sum_i b_i V_i \\ \tilde{\Psi} &= \sum_{\alpha i} a_{\alpha i}^* \tilde{U}_{\alpha i} + \sum_i b_i^* \tilde{V}_i \end{aligned} \right\} \quad (69)$$

なる形に展開出来る。但し $a_{\alpha i}, b_i$ 等は

$$\left. \begin{aligned} a_{\alpha i} a_{\beta j}^* + a_{\beta j}^* a_{\alpha i} &= \delta_{\alpha\beta} \delta_{ij} \\ a_{\alpha i} a_{\beta j} + a_{\beta j} a_{\alpha i} &= a_{\alpha i}^* a_{\beta j}^* + a_{\beta j}^* a_{\alpha i}^* = 0 \end{aligned} \right\} \quad (70)$$

$$b_i b_j^* + b_j^* b_i = \delta_{ij} \quad \left. \begin{aligned} b_i b_j + b_j b_i = 0 \\ a_{\alpha i} b_j^* + b_j^* a_{\alpha i} = 0 \end{aligned} \right\} (70)$$

等の交換関係を満足する演算子で、

$$n_{\alpha i} = a_{\alpha i}^* a_{\alpha i} \quad n_i = b_i^* b_i \quad (71)$$

等価なものは固有値 $(0, 1, 2, \dots)$ といふだけであ
 $v \downarrow$ 夫は α 番目の分子の中 i 番
 目の状態にある電子の数 n_i i 番目の状態
 にある自由電子の数を表わしてゐる。

(69) を (57) の最初の式の式に代入すると、電
 荷密度は

$$\sigma = \sigma_b + \sigma_f + \sigma_{bf} \quad (72)$$

は三つの部分に分れる。従し

$$\sigma_b \equiv -e \left\{ \sum_{\alpha i} n_{\alpha i} (\tilde{u}_{\alpha i} u_{\alpha i}) + \sum_{\alpha} \sum_{i \neq j} a_{\alpha i}^* a_{\alpha j} (\tilde{u}_{\alpha i} u_{\alpha j}) \right. \\ \left. + \sum_{\alpha \neq \beta} \sum_{i, j} a_{\alpha i}^* a_{\beta j} (\tilde{u}_{\alpha i} u_{\beta j}) \right\}$$

$$\sigma_f \equiv -e \left\{ \sum_i n_i (\tilde{v}_i v_i) + \sum_{i \neq j} b_i^* b_j (\tilde{v}_i v_j) \right\} \quad (73)$$

$$\sigma_{bf} \equiv -e \sum_{\alpha i} \sum_j \{ a_{\alpha i}^* b_j (\tilde{u}_{\alpha i} v_j) + b_j^* a_{\alpha i} (\tilde{v}_i u_{\alpha i}) \}$$

(8)

したが、これを (6) に代入すると、遅延ポテン

シャル φ_r は

$$\varphi_r = \varphi_b + \varphi_f + \varphi_{bf} \quad (74)$$

の三部分に分かれる。

(11)

合への擾乱に特別な困難は伴わなかつた。
所の電子力学に於ては、次の如き新しい問題が
發生する。即ち外部電磁場が定常的の場合に
は、媒質中の各電子の原子核乃至は内部軌道に
束縛されし電子による静電場及び外部電磁場
の作用の下に夫は一定のエネルギーの定常状
態に落ち着いてゐると考へてよい。これに反し
て周期的に変化する外部電磁場の作用する場
合には、各電子の一つの定常状態に止まること
が出来ず、輻射を放出或は吸収しつつ異なる状
態間の轉移を繰り返してゐるのである。かゝる場合に
對しても、前節までの停滯^止と~~進行~~^{同核の}理論の
趣を並行して述べた各めには、~~— 83 まで —~~
~~の Klein⁽⁴⁾ や Heisenberg⁽⁵⁾ の方法よりも、むしろ~~
~~— 攝動論に於ける定常的方法の延長である~~
所の Sommerfeld の方法⁽⁸⁾ を採用するのが
最も都合がよい。これは初論~~も~~ 83 まで述べた
Klein⁽⁴⁾ や Heisenberg⁽⁵⁾ の對態論的方法と本質
的に同じものである。

13. ~~この~~ ~~方向~~ ~~に~~ ~~進む~~ ~~平面~~ ~~波~~ ~~を~~ ~~既~~
外部電磁場として

(12)

へ、その偏りの方向を y 方向とすれば、電子の振動
 電磁場のポテンシャルは

$$a_{0y} = a_0 \cos 2\pi\nu(t - \frac{x}{c}) \quad (82)$$

$$a_{0x} = a_{0z} = 0$$

と仮定する。これを Dirac の波動方程式 (54) に
 代入すると

$$\left\{ i\hbar \frac{\partial}{\partial t} + e\phi_0 + \hbar c \boldsymbol{\alpha} \cdot \text{grad} - \beta mc^2 \right\} \psi \\
 = e a_0 \alpha_y \cos 2\pi\nu(t - \frac{x}{c}) \psi \quad (83)$$

となる。但し ϕ_0 は電子の振動 — 原子核や
 内部電子による — 静電場に対するスカラー
 ポテンシャルを意味する。この式の右邊を摂動
 項と見做し、摂動論の第一近似で満足するこ
 とにすれば、 ψ は ~~一般に~~ ψ は (60) と同様、

$$\psi = \sum_{\alpha_i} a_{\alpha_i} u_{\alpha_i} + \sum_i b_i v_i \quad (84)$$

$$\tilde{\psi} = \sum_{\alpha_i} a_{\alpha_i}^* \tilde{u}_{\alpha_i} + \sum_i b_i^* \tilde{v}_i$$

(13)

この形に書ける。但し (u_{ai}, v_i) は u, v である

$$u'_{ai} \equiv u_{ai} + \left\{ \sum_{j \neq i} c_{aij}^{(1)} u_{aj} + \sum_j d_{aij}^{(1)} v_j \right\} e^{-2\pi i \nu t} \\ + \left\{ \sum_{j \neq i} c_{aij}^{(2)} u_{aj} + \sum_j d_{aij}^{(2)} v_j \right\} e^{2\pi i \nu t}$$

$$v'_i \equiv v_i + \left\{ \sum_{a,j} e_{iaj}^{(1)} u_{aj} + \sum_{j \neq i} f_{ij}^{(1)} v_j \right\} e^{-2\pi i \nu t} \\ + \left\{ \sum_{a,j} e_{iaj}^{(2)} u_{aj} + \sum_{j \neq i} f_{ij}^{(2)} v_j \right\} e^{2\pi i \nu t}$$

(85)

これを意味して (85) と (84) に代入すると

$$\Psi = \sum_{ai} a'_{ai} u_{ai} + \sum_i b_i v_i$$

$$\tilde{\Psi} = \sum_{ai} a'^{*}_{ai} \tilde{u}_{ai} + \sum_i b_i'^{*} \tilde{v}_i$$

(84)'

と書ける。但し

$$a'_{ai} \equiv a_{ai} + \left\{ \sum_{j \neq i} c_{aji}^{(1)} a_{aj} + \sum_j e_{jai}^{(1)} b_j \right\} e^{-2\pi i \nu t} \\ + \left\{ \sum_{a,j} c_{aji}^{(2)} a_{aj} + \sum_j e_{jai}^{(2)} b_j \right\} e^{2\pi i \nu t}$$

(86)

(14)

$$b'_i = b_i + \left\{ \sum_j d_{\alpha j i}^{(1)} a_{\alpha j} + \sum_{j \neq i} f_{j i}^{(1)} b_j \right\} e^{-2\pi i \nu t} \\ + \left\{ \sum_j d_{\alpha j i}^{(2)} a_{\alpha j} + \sum_{j \neq i} f_{j i}^{(2)} b_j \right\} e^{2\pi i \nu t}$$

である。右(85), (86)の右辺の $c_{\alpha i j}$, $d_{\alpha i j}$ 等はいつれも後素数係数を係数とする四行四列の行列を意味する。是れを(84)の形に於ては(60)の展開と似ておるが、その係数である $a'_{\alpha i}$ 等の演算子は、最早(61)の如き、簡易な交換関係を満たすものとして記述せねばならぬ。

是を(84)を(58)に代入すると、是より電荷密は

$$\sigma = \sigma'_b + \sigma'_f + \sigma'_{bf} \quad (87)$$

其の各部分の含めは、

$$\sigma'_b \equiv -e \left\{ \sum_{\alpha i} a'_{\alpha i}{}^* a'_{\alpha i} (\tilde{u}_{\alpha i} u_{\alpha i}) \right. \\ \left. + \sum_{\alpha} \sum_{i \neq j} a'_{\alpha i}{}^* a'_{\alpha j} (\tilde{u}_{\alpha i} u_{\alpha j}) + \sum_{\alpha \neq \beta} \sum_{i \neq j} a'_{\alpha i}{}^* a'_{\beta j} (\tilde{u}_{\alpha i} u_{\beta j}) \right\} \\ \sigma'_f \equiv -e \left\{ \sum_i b_i{}^* b_i (\tilde{v}_i v_i) + \sum_{i \neq j} b_i{}^* b_j (\tilde{v}_i v_j) \right\} \\ \sigma'_{bf} \equiv -e \sum_{\alpha i} \sum_j \left\{ a'_{\alpha i}{}^* b_j (\tilde{u}_{\alpha i} v_j) + b_j{}^* a'_{\alpha i} (\tilde{v}_i u_{\alpha i}) \right\} \quad (87)$$